



第8回かながわ教育学講座

立冬を迎え、朝夕の寒さも増してきました。日が沈むのもだんだんと早まり、季節の移り変わりを肌で感じます。平成30年11月11日(日)第8回かながわ教育学講座を開講しました。今回のテーマは「児童・生徒指導」です。

児童・生徒指導

講師：東洋大学 藤井 幹夫 非常勤講師

児童・生徒指導には、集団に対して行う指導(集団的指導)と個別に対して行う指導(個別的指導)があります。具体的には、問題を予防する指導や問題が起こった時に解決する指導(消極的指導)や子どもたちに能力をつける指導や支援をする指導(積極的指導)があり、どの児童・生徒指導の場面でも、これらのすべての考えをもって指導することが大切です。

また、児童・生徒指導の事例として、よく取りあげられるのはいじめに関する指導です。いじめは、多くが被害者と加害者、いじめに同調する観衆と、いじめを黙認する傍観者がいるという4層の集団的構造をもっています。この集団的構造によって、いじめを固定化し、長期化させてしまいます。

いじめ解決に向けて、教員が毅然と指導することはもちろんのことですが、子ども同士が共感し合い、互いに自己存在感を感じるようにする必要があります。そのためには、他者の気持ちを理解させたり、自分の行動を客観視して反省させたりするロールプレイ(役割演技)、他人と良い関係を築き、社会に適応するために必要なスキルを身につけさせていくソーシャルスキルトレーニングが有効です。

様々な場面で児童・生徒指導は行われますが、問題行動についてだけ指導をするのではなく、なぜそのような状態になっているのか、背景にも思いを馳せ、指導に当たることが重要だと学ぶことができました。



藤井 幹夫 非常勤講師

グループ活動

今回のグループ活動は、前半の講義を受けて、子どものどのような言動がいじめとなり得るのか、また、該当児童・生徒や傍観者がどう感じているのか、ロールプレイを通して、子どもの見方やいじめを未然に防ぐ方法について考えを深めることをねらいとして行いました。班ごとに11の場面の中から1つを選び、ショートストーリーを考え、教員がいじめでないと判断したパターンと教員がいじめであると判断したパターンをそれぞれ演じました。

受講者が演じている様子や話し合いの姿から、主体的に学ぶ姿勢が感じられました。実際に演じてみることで、それぞれの立場で感じる思いや気づきがあり、より深い話し合いや新たな発見につながったことと思います。教員となって指導する際の糧となる経験が得られたのではないのでしょうか。



特別講座 3

チャレンジコース受講者と受講希望をしたオープンコース受講者8名を対象に、特別講座3を開講しました。小学校、特別支援学校、中学校又は高等学校英語に分かれ、それぞれ講義を行いました。

小学校「小学校における授業づくり」 講師：八木 正純 教育指導員

授業をつくる上で、学習課題づくりが重要です。子どもたちは、好奇心旺盛で、新しい知識を得たり、できなかったことができるようになったりすると、喜びを感じ、ますます意欲を高めていきます。授業には、単元を通して身に付けさせたい力があり、1時間ごとに身に付けさせたい力があります。それらの力をつけることができ、なおかつ児童が興味をもって自ら取り組める学習課題とはどんな課題なのか考えながら、授業を組み立てていく必要があります。



八木 正純 教育指導員

そして、学級の友達と「互いの意見をあたたかく聴いて」、「比べたり修正したりして自分で考え」、「考えをつなげて発展させる」ことで学びを深め、子どもたちの力を伸ばしていくことができます。あたたかい聴き方、やさしい話し方があふれる学級の中で、子どもたちは学ぶ喜びを感じることができ、授業を支える学級経営の大切さも学びました。小学校における授業の在り方を学んだことで、さらに具体的な「良い授業」のイメージをもてたことと思います。

特別支援学校「特別支援学校の現状と課題」 講師：特別支援教育課 小原 俊祐 指導主事



小原 俊祐 指導主事

障害者差別解消法により合理的配慮の提供が法的に義務付けられました。国際的にもICF（国際生活機能分類）の考え方が広がり、環境を整えること（合理的配慮を提供すること）で活動への参加を促進していくことが求められています。

神奈川県では、支援教育の理念のもと、すべての子どもが「共に学び共に育つ」インクルーシブ教育を推進しています。講義の後半では、受講者が実際に体験してきた学校現場の合理的配慮について情報交換し、「共に学ぶ」ための環境づくりについて考えていきました。今後、実践力向上講座やスクールライフサポーターで現場を見る際の一つの

視点になったのではないのでしょうか。

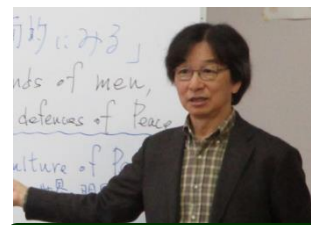
中学校英語又は高等学校英語「国際教育の視点に基づいた英語教育」

講師：早稲田大学文学学術院 山西 優二 教授

国際教育の歴史を辿ると、ユネスコ憲章と深い関わりがあります。戦後、文化の普及と正義・自由・平和のための人類の教育を目指し、ユネスコを中心に活動が進められてきました。

国際教育が平和な社会を築き、文化の理解を促す上で、基本となるのは身近な一人ひとりと人間関係づくりです。その要素として、自己肯定感、コミュニケーション力、協力の三つがあり、これらを高めていくことが国際教育の第一歩となります。

英語を含むことばが持つ「多様性」「身体性」「文化性」「問題性」に注視し、ことばを「コミュニケーションの道具」としてだけではなく「対象」としてとらえる必要があります。ますますグローバル化が進展する中、英語教育を通して、生徒に英語によるコミュニケーション能力を養うだけでなく、自己肯定感を高め、協力し合う心を育て、様々な文化の理解についても学ぶ授業づくりの重要性を考えることができたことで



山西 優二 教授